

214
4
269

尋常小學作文教授書
三

K/21.82
128
3

K 121.82

128

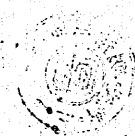
3

國光社編纂

尋常小學作文教授書

東京

國光社



國光社編纂

尋常小學作文教授書三

國光社編纂

尋常小學作文教授書三

國光社編纂

教授の注意

(一) 文題を與ふるに當りては、巧に問答談話して、興味を喚起し、以て、文題の要項を了得せしめ、思想の排列を工夫せしむべし。

(二) 作文教授の方法の一二を略記すべし。

(イ) 復文法 文題につきて問答し、その談話を、塗板に書して、文章に改めしむ。

(ロ) 接辭法 單文數個を連接せしむる場合の如く、主に天爾波の使用を練習するものなり。

(ハ)分解法 連文を單文に分解せしむ。即、接辭法を反對に用ゐるなり。

(ニ)正誤法 誤りある文章を出して改訂せしむ。

(ホ)問答法 文題につきて問答する際、必要なる字句を塗板に書して作らしむ。

(ヘ)彙語法 文題とある文字とを與へて、自由に作らしむ。

(ト)省略法 文章中、ある語を略すとも、意味の通ずる場合に、之を省かしむ。

(チ)敷衍法 一語一文の意味を敷衍して、明瞭精密ならしむ。

(リ)摸擬法 文例に摸擬して作らしむ。

(ヌ)補欠法 故意に、欠けたる所ある文を出して字、或は句を補はしむ。所謂、填字法なり。

(ル)自作法 單に、文題を與へたるのみにて、思ふがまゝを記述せしむ。

(三)書牘文は、兒童には適せざるものなれども、實用上捨つべからざるものなれば、本書も、讀本と相伴はしめ、務めて、言語に近からしめて、之を加へ置きたり。

(四)尋常小學校にて教授すべき作文は、これを、男女に區別せず、つとめて平易に綴らしむべし。

(五)作文帳に記入せしむるに當りては、字体を、丁寧に書し、天地のあけ方、及文字の間隔等に留意せしむるを要す。

(六)教授上注意すべき諸點は、卷の一、二、四のはじめにも記述したれば、參照せらるべし。

目次

上篇

第一課	伊勢大神宮	敬語の用法
第二課	日本武尊	敬語の用法
第三課	大日本國	及又の用法
第四課	富士山	其の甚の用法
第五課	琵琶湖	其の用法
第六課	航海	且の用法
第七課	野中兼山	之の用法
第八課	はまへの遊	申候の用法
第九課	麻	下されたくの用法

第十課	たちぬひ	ど、どもの用法	申上候の用法
第十一課	茶 <small>(富士山)</small> 船 <small>(船)</small>	殊の用法	致し候仕候の用法
第十二課	工藝	されどもの用法	致したく、仕度の用法
第十三課	銅	故の用法	致すべく、仕るべくの用法
第十四課	鐵		存じ候の用法
第十五課	汽車		候はんの用法
第十六課	牛馬		候々の用法
第十七課	牧畜		御伺申上候の用法
第十八課	飲食物		の由の用法
第十九課	看病		候ゆゑの用法
第二十課	日記		候につきの用法
第二十一課	秤		

將然言の練習

手紙の認方

- 第二十二課 商人
- 第二十三課 郵便
- 第二十四課 夕立
- 第二十五課 桶峽
- 第二十六課 八幡太郎
- 第二十七課 牛若丸(一)
- 第二十八課 牛若丸(二)
- 第二十九課 兵器
- 第三十課 みくじの民

下篇

- 第一課 こゝれいさ
- 第二課 我等が祖先

御座候の用法

これあり候の用法
之なく候の用法

- 第三課 ひつまじき家
- 第四課 穀物
- 第五課 かんなめ祭
- 第六課 果物
- 第七課 わし
- 第八課 山林
- 第九課 紅葉
- 第十課 薪炭
- 第十一課 おさん
- 第十二課 塗物
- 第十三課 勉強
- 第十四課 水

人を招く時の口上
人に招かれし時の口上
贈物したる時の口上
貰物したる時の口上
見舞をのぶる時の口上
運動に誘ふ時の口上
見物に誘ふ時の口上
送り状の認方
品物受取證の認方
物を借る時の口上
金錢受取證の認方

第十五課 のさばをおつる

第十六課 徳川光圀

第十七課 年のはじめ

第十八課 着物

第十九課 忍耐

第二十課 貯蓄

第二十一課 祈年祭

第二十二課 貨幣

第二十三課 小賣卸賣

第二十四課 富田久助

第二十五課 三府

第二十六課 孝明天皇

年始の口上

誂物する時の口上

誂物を催促する時の口上

誂物を送る時の口上

金錢を借る時の口上

開店をひろゝする口上

物を借る時の口上

第二十七課 明治の御代

第二十八課 平じよゝの戦

第二十九課 黄海の戦

第三十課 ひろき世界の

借り物を返す時の口上

物をおくる時の口上

尋常
小學 作文教授書三 上篇

第一課 伊勢大神宮 敬語の用法

(一)伊勢の大神宮は畏くもわが 天皇陛下の御先祖にましま
す 天照大御神をいつきまつれる宮なり。

教授例

文例 前題

第一段 豫備

目的指示 今日はおそれ多くも吾が 天皇陛下の御先
祖にまします 天照大御神をいつきまつれる伊勢の大
神宮のことを、文に綴らしむと告ぐ。

復習 繪圖を示し、若くは、讀本によりて、大神宮の尊きこ

とを問答談話す。

既習の文章を口唱して、書取らしむ、即、

あのものやしろは、われくの先祖なる氏神さまをまつれる宮なり。(作文書二第一課)

必要の文字にして、生徒の忘れたるべしと思はるゝものあらは、板書して、之を示す。

第二段 提示

文に綴らしむべき要領を、言語に修述せしむ。

(注意) 例文中「吾ガ」ハ、赤子ノ慈母ヲ慕フガ如キ親愛ノ

情ノ發セル詞、又「畏クモ」ハ、申シ上ゲンモ畏多シト、恐縮ニ堪ヘザル情ヲアラハシテ、十分ノ敬意ヲ表セルモノナリ。

敬ト、愛トハ、我ガ臣民ノ、皇室ニ對シマツリテ缺クベカラザル情意ナリ。之ヲ、言語ニ修述セシムルニハ、十分ナル注意ヲ要ス。其ノ他、「御、まします」ナドノ敬語ニモ、深ク注意スベシ。

言語に修述し得るに至りて、後、文に綴らしむ。

必要なる文字は、生徒の間ふがまゝに、之を教ふ。

第三段 比較

生徒綴り終らば、批評をし、添削を加ふ。

衆生徒の作文を比較し、傍、既習の文章(前記の類)と、對照して、類同の點を舉げしむ。

第四段 概括

批評、添削、及、比較によりて、文章構成上の、明確なる觀念を與

へ、完成せる文章に對する概念を生ぜしむ。
範文を示し、數回練習せしめて、記帳せしむ。

第五段 應用

左の文題を與へて、文に綴らしむ。場合によつては、口頭作文に止むるも可なり。

かし原神宮 熱田神宮 八幡神社

(注意) 場合によつては、或は教授の形式を省略し、或は直に文に綴らしむべき事實の談話を板書して、これを文章に改譯せしむることあるべし。

かし原宮神

(二)やまとのかし原神宮は、畏くも、わが 天皇陛下の御先祖に
まします 神武天皇をいつさまつれる宮なり。

(注意) 敬語は、徳性涵養上注意すべきことなり。今、その場合を略記すべし。

(1) 名詞に敬語を附するには、詞のはじめ、或は、終に於てす。

例せば、御位、父上、母様、御衣等の如し。

(2) 代名詞には、自尊卑の區別あり。例せば、君、陛下、臣、先生といふが如し。若、これを、妄用するが如きことあらば、却りて、禮を失す。注意すべし。

(3) 動詞も、代名詞の如く、詞自身に、敬意を有する者あり。例せば、申す、奉る、しろしめす、おほしめすの如し。

(4) 他の語を添へて、敬意を表する者あり。給ふ、さす、らる等の如し。

第二課 日本武尊 敬語用法

日本武尊は、えびすを平け給ひけり。

(三) 日本武尊は、東國のえびすをうち平け給ひけり。

日本武尊は、景行天皇の皇子にて、東國のえびすをうち平け給ひけり。

(四) 日本武尊の、みつるぎをぬきはなちて、立ち給ふ御すがたは、まことに、たふとくまします。

第三課 大日本國

及び又其の用法

(五) 我が國ヲ分ナテ、畿内、八道、オヨビ、リユーキユー、臺灣トシ。又サラニ、小ク分ナテ、多クノ府縣ヲオク。

(六) 我が大日本國ハ、大小數千ノ島ヨリ成リ、其ノ形、ホソナガクシテユミナハレルニニタリ。

第四課 富士山 其の甚の用法

富士山は、名山なり。

(七) 富士山は、我が國の名山なり。

富士山は、我が國の名山にて、その形うるはし。

富士山は、我が國の名山にて、其の形、まことにうるはし。

(八) 富士山は、高き山にて、其のいたゞきは、甚さむければ、雪のことなることなし。

第五課 琵琶湖 其の用法

(九) 琵琶湖は、富士山と共に、名高くして、其のほとりには、景色よき處多し。

候の用法

(一〇)あふみ八けいのゑ、御目にかけさふらふ。

(一一)ふで一本御目にかけさふらふ。

(一二)みかん一かを御目にかけさふらふ。

第六課 航海 且の用法

汽船ハ、スミヤカナリ。

(一三) 汽船ハ、ナンセンノウレヒスクナクシテ、スミヤカナリ。

汽船ハ、蒸氣ノ力ニヨリテ行クモノニテ、ナンセンノウレヒスクナク、カツ、スミヤカナリ。

(一四)帆船ハ、ヒロキ海ヲワタルニハ、アヤフクシテ、カツ、オソク。

第七課 野中兼山 之の用法

野中兼山ノナカノケンサンハ、かしこき人なり。

(一五) 野中兼山は、蛤の産するよーにせし、かしこき人なり。

野中兼山は、土佐の海に、蛤の産するよーにせし、かしこき人なり。

(一六)野中兼山は、蛤を、土産にもちかへり、これを海にかけ入れしかば、人々おどろきけり。

第八課 ハマベノアツビ

(一七)ハマベニテ、魚ヲツリ、又貝ヲドテヒロヒテアツブハ、ハナハダオモシロシ。

申候の用法

(一八)今日東京よりかへり申さふらふ

(一九)此の土産御目にかへ申さふらふ

(二〇)はまぐり一かていささかながら差上申さふらふ

(二一)さと一斤いさよかながら差上申さふらふ

第九課 麻

(二二)麻ハ、ウミテ、絲トシ、布ニオリ、又ハ、網ニスクナド、效用多シ。

下されたくの用法

(二三)麻のたね五合御かし下されたくさふらふ

(二四)麻のたねまき御てつたい下されたくさふらふ

(二五)たゞ今御出下されたくさふらふ

第十課 たらぬい

(二六)タナヌヒハ、女子ノワザノ中テ、一バン大切ナモノデゴザ

リマスカラ、セイダシテナラハネバナリマセヌ。

申上候の用法

(二七)はおりのたちぬひを御をしへ下されたく御ねがひ申上候

(二八)さいほ一書二三日の間御かし下されたく御ねがひ申上候

(二九)きもの一まい御おくり下されたく御ねがひ申上候

第十一課 茶

(富士山)
(船蛤)

どどもの用法

(三〇)茶ハ、我が國イヅレノ地ニモ産スレドモ、ユトニ、名高キハ、山城ノ宇治ナリ。

富士山

(三一)國々ニ、山ハ多ケレドモ、富士山ノゴトク、形ノウルハシキ

ハアラズ。

船

(三二)ムカシハ、木造ノ、小サキ船ヲ用キタレド、今ハ、大ナル汽船ヲ用キルニイタレリ。

蛤

(三三)メヅラシキ蛤ヲモラハントテ、樂ミテマナ居タレドモ、兼山ハ、一ツモアタヘズシテ、海ニナゲイレタリ。

(注意)

どどもは、上の語の意を翻していふとき用うる。天爾波なり。動詞の第三變化に連る。

第十二課

工藝

殊にの用法

(三四)我が國ノ工藝品ニハ、ヨキモノ多ク、コトニ、オリ物、ヤキ物、

ヌリ物、ナドハ、スグレテウツクシク、外國ノ人モ、アタヒ高ク買ヒトルナリ。

いたし候、仕候の用法

(三五)この茶碗しん上いたし候仕候

(三六)只今さん上いたし候仕候

(三七)御手紙はいけんいたし候仕候

(三八)しよーちいたし候仕候

第十三課

銅

されどもの用法

(三九)銅ノサビハ、ロクシヨートイヒテ、毒物ナリ。サレドモ、ウツクシキユエニ、エノグニ用キル。

(注意)

されどもは、接續詞なり。前句の意を翻すとき用

あることどもに同じ。

(四〇)銅ハ、ヤハラカナル金ニテ、ハモノニハツクラレズ。サレドモ板、針金ナドニ作りテ、其ノ用、甚多シ。

いたしたく候 仕りたく候の用法

(四二)小筆をちよつと拜借いたしたく候仕りたく候

(四三)國語讀本の五を四五日の間拜借いたしたく候仕りたく候

(四四)明日朝より野あそびに御ともいたしたく候仕りたく候

第十四課 鐵 故にの用法

(四四)鐵ハ、色クロクシテ、ミニクシ。サレドモ、用ノオホキユト、鐵ニマサレルカネナシ。

(四五)鐵ハ、色黒キガユエニ、黒金トイハレテ、人ニソマツニセラ
ルレドモ、用多キ金屬ナリ。

いたすべく候 仕るべく候の用法

(四六)明日さん上いたすべく候仕るべく候

(四七)うんどーくわいへ御ともいたすべく候仕るべく候

(四八)かならずせんさよーいたすべく候仕るべく候

第十五課 汽車

(四九)汽車は、蒸氣の力で走るもので、鳥のとぶよーにはやうで
ざります。

ぞんじ候の用法

(五〇)御みまい下されありがたくぞんじ候

(五一)讀本ながく御かし下されまことにありがたくぞんじ候

(五二)算術御教へ下されまことにかたじけなくぞんじ候

第十六課 牛馬

牛ハ、スナホナルケモノナリ。

牛モ、馬モ、共ニ、スナホナルケモノナリ。

(五三)牛モ、馬モ、共ニ、スナホナルケモノナレバ、田畑ヲダガヤサシム。

牛モ、馬モ、共ニ、スナホナルケモノナレバ、田畑ヲダガヤサシム、又、車ヲ引カシム。

(五四)牛ハ肉モ、乳モ、共ニ、人ノヤシナヒトナルモノナリ

候はんの用法

(五五)御びよーきにて御なんぎに候はんとぞんじ候

(五六)明日は天氣に候はん

第十七課 まきば への用法

(五七)余一人ニテ、牧畜ヲハジメシニ、今ハ數百匹ノコマヲ飼ヒ

オク程ニナレリ。

(注意) このには、豫想に違ふ意を表はすに用ゐる天爾波なり。

(五八)ハジメハ、一方ナラヌ苦勞ヲシタリシニ、今ハ、ユノ上モナクタノシクテ、サキノ苦勞モ、ソスラルムバカリナリ。

候々の用法

(五九)みなくさま御さけんいかゞに候や

(六〇)御病氣はいかゞに候や

(六一)何日に東京へ御出なされ候や

第十八課 飲食物

(六二)飲物も食物も色々ありますが、いづれも、からだの養となるものをえらばねばなりません。

御伺申上候の用法

(六三)御病は如何に候や御伺申上候

(六四)みなくさま御さけんいかゞに候や御伺申上候

第十九課 看病

(六五)看病スルニハ、シンセツニシテ、カツ、モノシヅカナルベシ。

の由の用法

(六六)みなくさま御おじの由安心仕候

(六七)あなた様御病氣の由今日は御よーす如何に候や御伺たく候

第二十課 日記

(六八)わたくしは、日記に、日々の物事を記しておきまして、のちのおぼえにいたします。

候ゆゑの用法

(六九)皆々おじに候ゆゑ御安心下されたく候

(七〇)私病氣は大ぶん、よろしく候ゆゑ御安心下されたく候

第二十一課 秤

(七二)秤ハ、物ノ目方ヲハカルニ用キルモノニシテ、サヲ秤ハ、サ
ヲノ一方ニ、分銅ヲカケ、一方ニ、物ヲカケテ、目方ヲハカルナ
リ。

につきの用法

(七二)私病氣につき今日けっせき仕候

(七三)茶五斤御おくり申候につき御うけ取り下さるべく候

第二十二課 商人 (二) 將然言の用法

(七四)コノ商人ハ、魚ヲ買ヒテ、町ニ賣ラントセリ。利益アルナラ
ン。

商人 (二)

(七五)山中ニテ買ヒタル材木ヲ、町ニオクラントス。

(七六)ハマベニテ買ヒトリタル魚ヲ、ヤマガニ持テ行キテ賣ラ
ントス。

加藤清正

(七七)加藤清正ハ、淺野幸長ノ、テキニトリマカレタルヲキ、テ、
時ヲウツサバ、アヤウカラントテ、直ニオモムキスクヒタリ。

第二十三課 手紙の認方

(七八)

おたのみの金子令

日郵便爲替にて御
送り申候に付御受
取をさるべく候

十一月十日 村上利助

山田文吉様

切手

東京市神田區
小川町二丁目十一番地
山田文吉様

十一月十日

大阪市東區
谷町一丁目五番屋敷
村上利助

金子さつそく御送り下さ
れまことにありがたく御
禮申上候

十一月十三日

大阪市東區
谷町一丁目五番屋敷
村上利助様

東京市神田區

小川町二丁目十一番地

山田文吉



第二十四課 夕立

(八〇)夏ノ日ニ、ニハカニ、ハゲシク降りイダシテ、タナマナ止ム
雨ヲ夕立トイフ。

(八一)ハゲシク降りタル雨、タナマナ止ミテ、東ノ方ニ、虹、ウツク
シクアラハレタリ。

第二十五課 桶峽

(八二)今川義元ハ、雷雨ハゲシケレバ、テキノセメクルコトナカ
ルベシト思ヒ、ユダンナシテ、織田信長ニウチトラレケリ。

(八三)信長ハ、義元ノ、心ヲユルシテ居ルヲウカマヒ、ニハカニ、ウ
シロノ山ヨリセメイリテ、義元ヲウチトリタリ。

第二十六課 八幡太郎

(八四)八幡太郎義家は、かりがれつをみたして、そらをとびゆく
さまをみて、てさのかくれてゐることを知り、のこらずうち
とつて、のちのよまでも、名をとゞめました。

御座候の用法

(八五)これは八幡太郎のゑに御座候

(八六)八幡太郎とは義家のことに御座候

第二十七課 牛若丸

(八七)五條の橋のうへで、夜なかすぎに、山法師が、おそろしい大
なぎなたをひつさけて、人きたらば、たゞ一うちにしよと、
待ちかまへて居るところへ、牛若丸は、笛を吹きながら通り
かよりました。

(八八)この山法師はたれて御座候や

第二十八課 牛若丸

(八九)べんけいは、大薙刀をふりあけて、たゞ一うちときりかけました。が、牛若丸は、すこしも、おそるゝけしきなく、小太刀をぬいて、わたり合ひました。しばらくのあひた、戦ふうち、べんけいは、したいしたいに、力おとろへ、つひにこゝさんいたしました。

これあり候の用法

(九〇)牛若丸のゑ二枚これあり候につき一枚差上申候

(九一)今日は用事これあり候につき、あそびにまゐりがたく候

第二十九課 兵器

(九二)ユ、ニエガキタルハ、弓、矢、ナギナタ、刀、ヨロヒ、カプト、オヨビ、馬シルシニテ、昔ノ軍人ノ用キシ兵器ナリ。

(九三)コレハ、大砲、小銃、オヨビ、軍旗ニテ、今ノ軍人ノ用キルモノナリ。

これなく候 御座なく候の用法

(九四)今日の兵器にはよろひかぶとは、これなく候御座なく候

(九五)よろひかぶとをみしことは、これなく候御座なく候

第三十課 みくじの民

(九六)めいぐのしでとをつとめて、國をとますのは、このないをりの忠義で、君の御ために、いのちをすてるのは、このないあるをりの忠義であります。

尋常小學作文教授書三終

尋常小學作文教授書三下篇

第一課 皇れい祭

(一)春ひがんざくららのさくころと、秋のひがん菊の花のさきに
ほふころとに、み代くの 天皇の御たまゝつりがござり
ます。これを、皇れいさいと申します。

口語を日本文語に改めしむ。

口語

日本文語

(二)只今おいで、下さい

御出下さるべく候

(只今)おいで、下されたい

御出下されたく候

(只今)參上致しました

參上致候仕候

(今夕)參上致しませう

參上致すべく候仕るべく候

病氣はどのよーにありますが
御なんぎであります
ありがたう存じます
おひくこよろようございます
御病氣はいかに候や
御なんぎに候はん
ありがたく存候
おひくこよろよく御座候

第二課 我等が祖先

日本武尊ハ、クマツナ平ゲ給へり。

日本武尊ハ、クマツ、及ビ、エビスナ平ゲ給へり。

日本武尊ハ、西國ノクマツ、及ビ、東國ノエビスナウナ平ゲ給へり。

日本武尊ハ、勇氣ニマシく、テ、西國ノクマツ、及ビ、東國ノエビスナウナ平ゲ給へり。

口語を日本文語に改めしむ。

口語

日本文語

(四)御病氣でありますそうですが

御病氣に候由御難儀に御座

御難儀にございませう

候はん

(皆々)無事でありますから

無事に候ゆゑ候につき

(今日は)用事がありますから

用事之れあり候ゆゑ(間)

(今日は)用事がありますねから

用事之れなく候ゆゑ(間)

第三課 むつましき家

(五)この人々は、まことにむつまじくして、よく業をはげみますから、家は、おひくにさかえるのでざりませう。

年いひに案内する口上

(六)明日父の年いはいはひ致候に付御いで下されたく候

第四課 穀物

(七)米、麥、豆、粟、黍ノ五ツヲ、五穀トイフ。其ノ中、最大切ナルモノハ、米ニテ、コレニ、ツグモノハ、麥ナリ。

(八)稻ハ、田ニウヽルモノト、畑ニウヽルモノトアリ。イヅレモ、春、タネヲマキ、夏ノハジメニ、苗ヲウエ、秋ニイタリテミノル。

ほう年いはいはひに招かれし時の口上

(九)今日はほうねんいはいに御まねき下され、まことにありがたく存じ候

第五課 かんなめ祭

(一〇)まい年十月十七日には、神なめ祭がござります。これは、今

年みのりました新穀を、伊勢の太神宮さまにおそなへ申す御祭でござります。

太神宮のゑづをおくる口上

(一一)伊勢太神宮のゑづ一まい差上げ申候

第六課 果物

(一二)みかん、なし、柿、りんご、ぶどうなどを、果物と申します。果物は、からのたの養になります。が、熟せぬものは、がいになります。から、たべてはなりません。

果物をもらひし時の口上

(一三)さしゆーみかん澤山御送り下されまことに辱く存候

第七課 わし

(二四)わしは、形大きくして、力つよく、性はなはたたけし。羽は、茶色をおび、眼は、ずるどくひかり、爪と、口はしとは、かぎの如く曲れり。常に、おく山にすみて、さつね、うさぎなどをとらへて食ふ。

見まひ物をおくる時の口上

(二五)あなた様御病氣の由御なんぎに候はんこの卵少しながら差上申候

第八課 山林

(二六)山林から、いろ／＼のさい木がでますから、家屋も立てられ、日用のどーぐも作られるのでござります。又、山林の樹木がおひしげつてゐますと、大水や、ひでりのうれひが少うございます。

さいます。

山あそびにいざなふ時の口上

(二七)明日は日よーにつま(某山に昇り候てはいかゞ御いざなひ申上候

第九課 紅葉

(二八)秋のくれ、野山の木々の、あかくいろづきたるを、紅葉といふ。紅葉の中にも、かへでは、ことにくつくしくして、春の花にも、まさりたり。

もの見に誘ふ文

(二九)明日よこすかへ軍艦を見に御供致したく候

第十課

薪炭

將然言の練習

- (二〇)アノ人ノ、木ヲキルハ、タキマニセントテナルベシ。
- (二一)向ノ山ヨリ、ケムリノ立チノボルハ、炭ヲヤケルナラン。
- (二二)コノ二人ノ、セイダシテ、薪ヲツクレルハ、町ニウラントテナラン。

送り状の認方

(二三)

記

一松板 貳百枚
 右汽船東京丸便にて差出し
 候につき御受取下され度候
 也

十一月五日

高山孝造

林松太郎様

第十一課 おさん

(二四)おさんは、ある家のめしつかひとなつてゐましたが、せん、わん、ちやわん、さらなど、ていねいにとりあつかひまして、何一つ、ごはしたことがござりませぬ。

(二五)この家の人々は、みなぎよーぎがよろしうございますので、おさんも、しぜん、それを見習つたのでござりませう。

品物受取證の認方

記

一松板

貳百枚

右たしかに受取申候也

十一月八日

林松太郎

高山孝造様

第十二課 塗物

(二七)塗物ハ、又漆器トモイフ。オホムネ、木ニテ、下地ヲ造リ、コレニ、漆ヲ塗リタルモノニテ、我が國ノ名産ナリ。

品物を借る時の口上

(二八)重箱一くみ二三日御かし下され度ねがひ上候

第十三課 勉強

(二九)人は、幼いときから、學校に行つて、讀書、算術などの、けいこをし、又、家にかへりましては、家業をもならはねばなりませぬ。

金錢受取證の認方

(三〇)

記

一金拾五圓參拾五錢也
膳椀貳拾人前代

右正二受取申候也

十一月二十一日

宮本善造

上田正太郎様

第十四課 水 疑問詞の練習

(三一)海ノ水ノアフル、コトナキハ、何故ヅ。

(注意) ぞは、上の疑問詞をうけて、其の意を強むるに用ゐる天爾波なり。

(三二)空中ヨリ、雨ノフリ來ルハ、何故ヅ。

(三三)空中ニ、雲ノアラハル、ハ、何故ナルカ。

(注意) や、か、何れも、疑問詞なり。この詞、文中に入るときは、其の下を結ぶ動詞、形容詞、助動詞は、共に、其の第二變化を用ゐる、又、詞の末に來ることあり。此の場合に、やは、動詞、形容詞、助動詞の第一變化に連り、かは、其の第二變化に連る。又、この二辭は、共に、疑ふ意なるものなれども、上に、疑問の詞あれば、その下には、やを用ゐずして、かを用ゐるを、定則と

す。

此ノ鐵瓶ニ水ヲ入レタリヤ。

今日ハ雨フルベキカ。

雨ノフルハ何故ナルカ。

今日ハ何日ナルカ。

第十五課 のきばをおつる

(三四)のさばをおちるあまたれでさへも、石に、あなをあけると申します。人も、つとめておこたらねほどのよいなことでも、出来ぬことはありません。

第十六課 徳川光圀

(三五)徳川光圀ハ、忠義ノ心深カリシ人ニテ、毎年元日ニハ、ハル

カニ、皇居ヲ拜シタリ。

年始の口上

(三六)今年もあいかはらず御ひき立のほどねがひ上候

第十七課 年のはじめ

(三七)今日は、一月一日で、どこの家にも、かど松を立て、日の丸のはたをたして、ございます。人々は、ねんしのいはひにまはり、こどもは、よいきものをきて、よろこばしそーにあそんでゐます。

年しの口上

(三八)つゝしんで新年の御よろこび申上候今年もあひかはらず御ひきたて下されたく候

第十八課 着物

(三九)ヨゴレタル着物ヲキルトキハ、病ニカ、リヤスク、又、人ニムカヒテモ、無禮ナルユエ、シバくセンタクシテ、アカツカヌキルベシ。

あつらへ物をする時の口上

(四〇)給一枚左の寸法に御仕立下され度御たのみ申候
たけ 三尺七寸
ゆき 一尺七寸

第十九課 忍耐

(四一)かんなんに耐へ、しんくを忍びてつとめはゆるべし。忍耐せざれば、かしこき人となること能はざらん。

誂物をとりにつかはす時の口上

(四二)昨日、たのみ申おき候羽織出来あがり候はゞ此のものに御わし下され度候

第二十課 貯蓄

(四三)モトハ、奉公セシホドノモノガ、多クノ奉公人ヲモツカフヨリニナリタルハ、何故ナルカ。

(四四)チリモ、ツモレバ、山トナルトイフコトアリ。ワツカノ金ナリトモ、心ニカケテ、貯ヘオカバ、シダイニツモリテ、千萬圓ノ資本トモナルベシ。

あつらへを送る時の口上

(四五)御あつらへの羽織御つかいの人へ御わたし申候につま

御受取下さるべく候

第二十一課 祈年祭

(四六)祈年祭は、かしくくも、天皇陛下が、われらのために、五穀のゆたかにみものらんことを祈らせたまふ御祭なり。

(四七)かしくくも、天皇陛下は、われら臣民のために、毎年二月に、祈年祭を行はせたまへり。

第二十二課 貨幣

(四八)紙幣ハ、金貨ノカハリニツクリタルモノナレバ、イツニテモ、金貨トヒキカヘラル、ナリ。

金錢をかるときの口上

(四九)申しかね候へども金五圓明はんまで御かし下され度ね

がひ上候

第二十三課 小賣商

(五〇)木綿一たん、はんえり一かけといふよーに、少しづつ、商品を賣りさばくを、小賣といふ。

開店ひろーの口上

(五一)この度日本橋通一丁目に小間物店相開き候につき多少にかまはらず御用仰付下され度ねかひ上げ候

第二十四課 富田久助

助動詞きぬの用法練習

(五二)ム、カシ、奥州ニ、富田久助トイフ人アリキ。

(注意) きは、程歴し時を示す語にて、衆動詞の第五變化に連るを、定則とす。但、加行變格の動詞に連ることなし。

(五三)不作ウチツマキケレバ、人々ノナンギ甚シカリキ。

(五四)毎朝ハヤクオキイデ、田畑ノ作物ヲ見マハリ、雨風ハダシキ日ニモ、ヤスミシコトナカリキ。

(五五)富田久助ハ、二宮先生ヲタヅネテ、教ヲウケンコトヲユヒヌ。

(五六)富田久助ハ、二宮先生ノ弟子トナリヌ。

(注意)ぬは、動作の往き畢れるを表す語にて、衆動詞の第五變化に連る。此の語多くは、自動詞に係る。

第二十五課 三府

(五七)我が國に都會は多くあれども、その中にて、最大なるは、東京、京都、大阪の三个所なり。

(五八)東京は我が國の首府にして、東西凡三里、南北凡四里あり。

第二十六課 孝明天皇

(五九)孝明天皇ハ、今上天皇陛下ノ御父皇ニオハシマシテ、アツク、臣民ヲアハレマセ給ヒキ。

書物借入の口上

(六〇)孝明天皇様の御歌を記し候書物一寸拜借仕度願上候

第二十七課 明治の御代

(六一)昔より明治の御世の如く榮えたるはあらず。かゝる御世に生れたるは、われ等の大なるさいはひなり。

物を返す時の口上

(六二)かんべい式のゑながく、御かし下されまことにありがたく存じ候

第二十八課 平ジョーノ戰

(六三)清國ノ兵、二萬アマリ、平ジョーノ城ニ、タテヨモリテ居タリシヲ、我が軍、ハゲシク攻メタテ、ワヅカニ、一日ニシテオトシイレタリ。

物をおくる時の口上

(六四)日清戰爭のゑづ三枚差上候につきまらん下されたく候

第二十九課 黄海の戰

(六五)黄海の沖にて、敵の軍艦十四隻、水雷艇六隻と、我が軍艦十二隻と、であひて、はげしく、戦ひしに、敵の軍艦は、或はやかれ、或はしづめられ、或はにけさりて、我が軍の大勝となれり。

(六六)清國は、りこーしよーをつかはして、和をこひければ、たい

わん、及び、りよー東半島をさかしめ、金二億兩をつくなはしめて、其のこひをゆるせり。後、りよー東半島は、故ありて、清國にかへしたり。

第三十課 ひろき世界

(六七)ひろき世界に、國は多けれど、我が國の如くによき國は、一も、あることなし。われ等は、互に、心をついにして、此の國をまもり、大君に、忠義をつくさんことを思ふべきなり。

尋常小學作文教授書卷三終

K124.8.

明治三十四年一月一日印刷
 明治三十四年一月四日發行



發行所
 發行所
 代表者
 印刷者

定價	
卷之一	金貳拾錢
卷之二	金貳拾錢
卷之三	金貳拾五錢
卷之四	金貳拾五錢
合計	金九拾錢

尋常小學作文教授書與附

株式會社 國光社編輯所
 東京市京橋一丁目一番地
 株式會社 國光社
 東京市京橋一丁目一番地
 株式會社 國光社
 東京市京橋一丁目一番地
 株式會社 國光社
 東京市京橋一丁目一番地
 株式會社 國光社
 東京市京橋一丁目一番地

